

平城宮第一次大極殿院西面回廊の調査

(平城第432・436・437次)

今年度、都城発掘調査部平城地区では、第一次大極殿院の区画施設である築地回廊の調査を集中的におこなっています。第一次大極殿院は大極殿を中心とする施設で、周囲を築地回廊で囲まれた空間でした。その範囲は南北318m、東西178mにも及びます。ここ大極殿院では、天皇の即位や元日朝賀など国家の重要な儀式がおこなわれていました。

西面築地回廊の調査は5月から開始し、南から順番に432次(936㎡)、436次(880㎡)、437次(390㎡)、438次(550㎡)と進めています。そして、すでに調査が終了あるいは終盤を迎えた前3者について、簡単に調査成果を解説したいと思います(写真左下)。

もっとも大きな調査成果のひとつに、築地回廊の東側の雨落溝を良好な状態で確認できたことがあげられます。雨落溝は回廊の屋根からの雨垂れを受ける溝のことで、ここでは溝の中に丸い石を詰めた状態が確認されました。この雨落溝は複数回改修されており、その都度石の大きさを変えるなどの違いが良くわかり、改修の様子が明らかとなりました。なお、雨落溝は本来ならば回廊の西側にもあったはずなのですが、西側の雨落溝は後世の削平によって完

全に失われていました。

もうひとつ面白い調査成果として、掘立柱塼が注目できます。恭仁京遷都(740年)の際、第一次大極殿は恭仁京へ移築されます。その時、平城宮では東面・西面築地回廊を掘立柱塼につくりかえます。今回の調査ではその塼の柱穴を多数確認しており、さらにそのうちの4基の柱穴には当時使われていた柱の根元部分がそのまま残っていました(写真右下)。柱の直径は太いもので48cmほどあり、コウヤマキという腐りにくい樹木を選んで使っていました。また、柱根の下には現代のレンガにあたる磚を敷いて、柱の沈下を防ぐ工夫が見られました。これらの磚の置き方は実にさまざまで、一段積みが多いなかで二段に積んだり、磚の下に瓦を敷いたり、と当時の人々の独自の工夫や性格が読み取れるかのようです。

去る9月28日には現地説明会を開催し、発掘調査現場を見学していただきました。当日は天候にも恵まれ、728人もの方々に参加いただき、平城宮中心部の遺構や遺物を間近に見ていただきました。西面回廊の発掘調査は現在も継続していますが、終了後には平城宮跡資料館にて速報展を企画しており、皆様のご来館をお待ちしております。

(都城発掘調査部 和田 一之輔)



発掘調査区と第一次大極殿(南西から)



掘立柱塼の柱穴に残る柱根(北西から)